

オカリーナによる生涯音楽学習（2）

—愛好者の学習実態と音楽の好み—

加藤 いつみ

I. はじめに

筆者は、名古屋市立大学人文社会学部研究紀要第11号において、収集してきた全国のオカリーナグループ459の存在、学習の形態、学習者の実態を紹介した。^(注1)その後オカリーナの普及は、2001年・2002年と神戸市内で開催された「オカリナフェスティバル in 神戸」や2001年に岡山市内にて「全日本オカリーナフェスティバル」が開かれこともあり、神戸市、岡山市を中心とする方面にみられた。筆者はこの2つのコンサートに参加して、データにはなかったグループを見つけ出したり、新たなグループ情報をもらったり、この1年半の間に70グループをキャッチすることが出来た。現在、529のデータを把握している。^(注2)

今回は、先に示した459グループより67を選び出し、そこに所属している学習者にアンケート調査を依頼した。その結果645人分の回答を得ることが出来た。その内容は、学習者自身に関すること、彼らの音楽的なバックグラウンド、レッスン日以外の練習の程度、学習と生活との係わり、そして各グループが練習している曲についてである。調査結果を分析することにより、彼らの音楽的なバックグラウンド、学習の動機、グループが練習している曲や音楽活動、そしてその活動を今後どんな形で社会参加に結び付けたいのか、等のことがわかってきた。

オカリーナは、わが国が直面している高齢化社会において、人々の生活に潤いを与え、社会参加を可能にする手段として、多くの可能性を備えた楽器である、と言われている。どうしてオカリーナが高齢者の生涯学習に相応しい楽器であろうか、そしてどんな導入の方法を講じたらより効果的に受け入れてもらえるのか等、筆者には研究すべき課題が残されている。「オカリーナによる生涯音楽学習」という大きなテーマに入るためにも、まず学習者の実態を知ること、そしてその実態から問題点を見つけ出すことの重要性を感じた。今回の報告は、今後の研究に発展させてゆくための第一歩である。

II. 調査方法と調査対象

(1) 調査方法

全国の459のオカリーナグループを比較するなかで、地方的な違い、あるいは普及・発展の相違から何かの特徴がつかめないかと考え、北海道と東北、関東、信越、北陸と東海、九州と沖縄と、地域を5つに分類し、それぞれの地方に属する70グループに調査依頼のはがきを送った。その結果、67グループから協力の申し出が得られた。その内訳は、北海道（7）、東北（2）、関東（21）、信越（8）、北陸（5）、東海（15）、九州（3）、沖縄（6）である。その返事を受けて、

各グループの人数に応じたアンケート用紙を指導者あるいは世話役の人に郵送したり、直接持って行った。その結果、645人分の回答を得ることが出来た。

(2) 調査対象

調査対象は、下記の67グループに属する645人である。表1は、グループが存在する地域と市町村、名称、そして回収数とその割合を示した。調査期間は、1999年4月から2000年3月である。

表1. 調査対象

調査対象：北海道7、東北2、関東21、信越8、北陸5、東海15、九州3、沖縄6、計67グループに属する645人
調査期間：1999年4月～2000年3月
回収率：65.0%

地方	県	市町村	グループ名	回収(枚)	%	
北海道	北海道	江別市	北木風詩(江別)	3	60.0	
		札幌市	北木風詩(西)	5	33.3	
		札幌市	北木風詩(中央)	16	100.0	
		札幌市	北木風詩(南)	4	11.4	
		札幌市	北木風詩(白石)	4	80.0	
		滝川市	北木風詩(滝川)	9	50.0	
		苫小牧市	北木風詩(苫小牧)	7	46.7	
東北	岩手県	花巻市	鷺鳥の友	1	10.0	
	岩手県	盛岡市	PL盛岡オカリナ倶楽部	35	72.9	
関東	埼玉県	越谷市	オカリナクラブひばり	11	68.7	
		川越市	川越オカリナの会	6	50.0	
		川口市	やさしいオカリナ	6	54.5	
		川口市	上青木オカリナクラブ	10	90.9	
		三芳町	オカリナアンサンブル「フォレット」	17	94.4	
		富士見市	オカリナアンサンブル「陶音」	13	72.2	
		千葉県	松戸市	オカリナサークル響	10	58.8
	柏市	レモンスカシュ	9	90.0		
東京都区内	東京都	江戸川区	オカリナアンサンブルフレンド	14	70.0	
		荒川区	荒川オカリナ愛好会	9	75.0	
		国分寺市	オカリナ・アンサンブル・ミュージズ	10	76.9	
		三鷹市	三鷹西社会教育館アゼリア	12	100.0	
東京都内	東京都	小平市	オカリナ	9	81.8	
		小平市	サークル・オカリナ	7	70.0	
		町田市	エスペロ	15	78.9	
		町田市	オカリナ・ポコ・ア・ポコ	27	79.4	
		北区	アンデスの風	11	100.0	
		北区	大塚クラス	6	85.7	
		神奈川県	横浜市	産経学園横浜	11	91.7
	横浜市	奈良北オカリナ同好会	15	42.9		
山梨県	山梨県	甲府市	どんぐりオカリナ倶楽部	5	100.0	
		塩尻市	塩尻オカリナクラブ	9	100.0	
信越	長野県	松本市	オカリナ愛好会～四季のハーモニー	13	100.0	
		松本市	松本オカリナクラブ	18	36.0	
		新潟県	新潟市	オカリナ・ドナーティ	9	75.0
		新潟市	オカリナサークル・風	10	76.9	
		新潟市	オカリナサークル・風人	6	85.7	
		新潟市	オカリナの会・トトロ	11	73.3	
		新潟市	ぐるーぶオカリナ	11	64.7	
北陸	石川県	金沢市	オカリナ・ロンド・イーハートーボ	1	25.0	
		金沢市	ヤマハ	4	100.0	
		金沢市	開進堂ヤマハ	1	5.0	
		小松市	大和デパートカネーションサークル	3	100.0	
		富山県	富山市	エーデルワイス	11	78.6
東海	岐阜県	高山市	飛騨オカリナの会「コロボックル」	8	100.0	
		多治見市	オカリナ「虹」	12	92.3	
		多治見市	たじみオカリナアンサンブル	6	75.0	
		静岡県	浜松市	鳩ぼっぼ	18	100.0
愛知県	愛知県	一宮市	オカリナかすみ草	19	90.5	
		春日井市	オカリナ・マーゴ	18	66.7	
		常滑市	ぐるーぶオカリナ	17	58.6	
		西春日井郡	オカリナアンサンブルHARUHI	4	100.0	
		豊橋市	豊橋オカリナの会	20	100.0	
		豊田市	オカリナ前林	15	71.4	

		名古屋市	なかオカリーナ	11	84.6
		名古屋市	みどりオカリナアンサンブル	14	77.8
		名古屋市	ヤマハリトルグース	4	80.0
		名古屋市	守山オカリナアンサンブル	10	66.7
		名古屋市	名市大オカリナアンサンブル	5	100.0
九州	大分県	大分市	P.L.オカリナクラブ	5	71.4
		大分市	ポーコ・ア・ポコ	5	100.0
		大分市	特別養護老人施設百華園職員	9	81.8
沖縄	沖縄県	浦添市	ウインズハーモニー	2	11.8
		沖縄市	音楽の楽しみ隊びっころ	8	32.0
		宜野湾市	ふれんず	1	5.6
		糸満市	オカリナサークルソネット	5	25.0
		那覇市	ガチョウの会	2	20.0
		那覇市	風雅	3	100.0
			67グループ	645	

Ⅲ. 調査内容

調査内容は、以下のようである。

Q 1. 自身に対するお尋ね

- | | |
|--------------|-------|
| (1) 性別 | グラフ 1 |
| (2) 年齢 | 表 2 |
| (3) 職業（勤務形態） | 表 3 |

Q 2. 音楽的なバックグラウンド

- | | |
|----------------------|-----|
| (1) 学習動機 | 表 4 |
| (2) メロディーが口ずさめる程度 | 表 5 |
| (3) 好きな音楽 | 表 6 |
| (4) 演奏できる楽器（オカリーナ以外） | 表 7 |

Q 3. 練習の程度

- | | |
|--------------------|------|
| (1) 練習の程度（レッスン日以外） | 表 8 |
| (2) オカリーナの学習歴 | 表 9 |
| (3) 難易度 | 表 10 |
| (4) 楽しさの程度 | 表 11 |

Q 4. 生活との係わり

- | | |
|----------------|------|
| (1) オカリーナ学習と生活 | 表 12 |
| (2) 結び付けたい活動 | 表 13 |

Q 5. グループが練習している曲

- | | |
|-----------------------|------|
| (1) グループが練習している曲（地方別） | 表 14 |
| (2) 良く吹かれる曲 | 表 15 |

Ⅳ. 調査結果

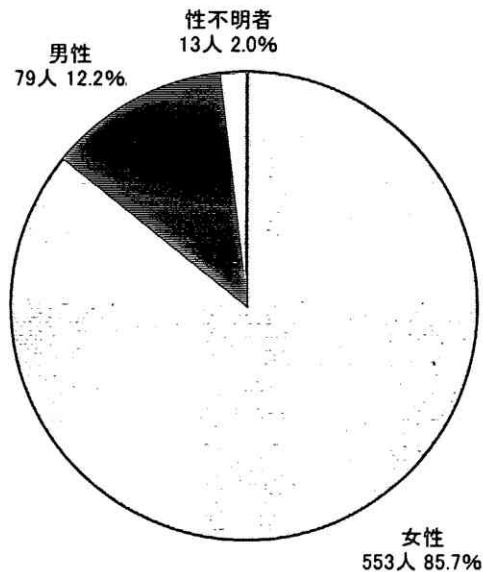
Q 1. 自身に対するお尋ね

- (1) 性別

音楽をするのは一般的に女性が多いが、オカリーナ学習の場合、男女の占める割合はどのよう

であろうか。グラフ1は、性別を示したものである。

グラフ1. 性別

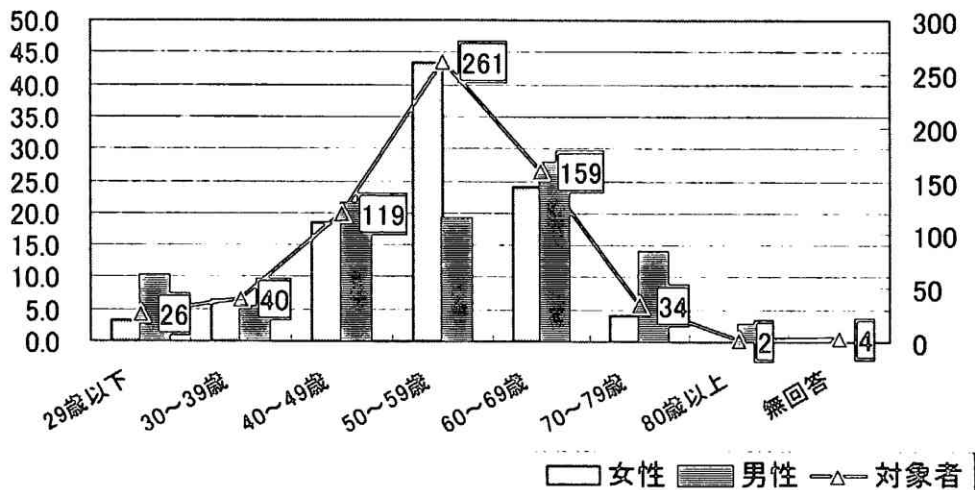


男女比は、女性が553人（87.5%）、男性が79人（12.5%）であり、圧倒的に女性が多い。筆者が1999年『日本生涯教育学会論集20（1999年）号』に発表した「生涯音楽教育へのオカリナ導入の一試み」^(注3)では、男性が15%を占めていたが、今回の調査では男性は12.5%とやや少なくなっている。山本思外里著『大人たちの学校』（1989年中公新書）によれば、カルチャーセンターに通うのは、絶対的に女性が多く、全体の86%を占めている。^(注4)又、金子敦子著『大正琴の世界』（1995年音楽之友社）も、大正琴の学習者は92%が女性であるという。^(注5)オカリナにおいても、他の楽器同様、女性の占める割合が高い。

(2) 年齢

オカリナ学習者は、何歳くらいの人であろうか。又、男性の参加者の年齢は、どの程度であろうか。表2は、年齢と性別を示したものである。

表2. 年齢と性別



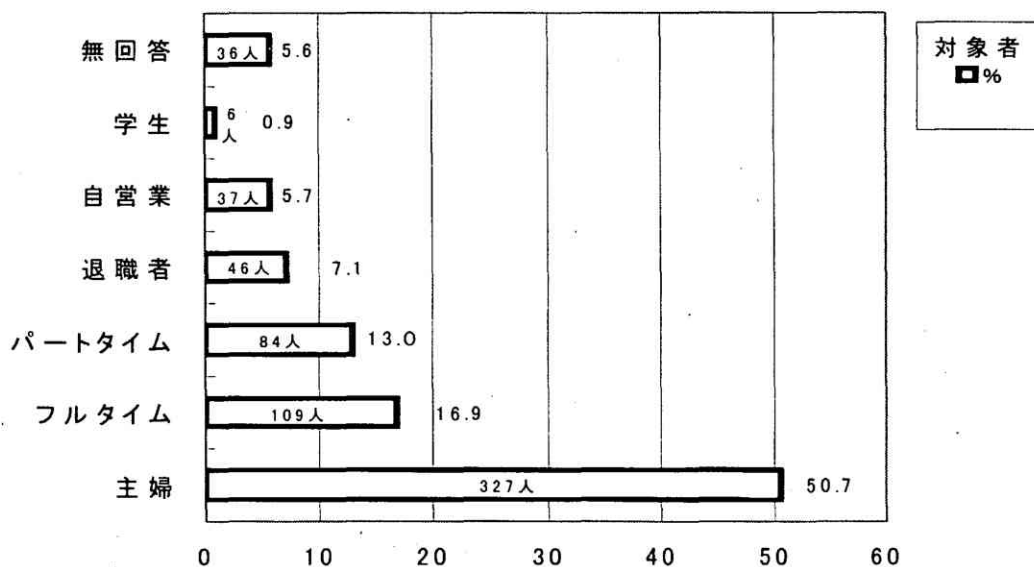
学習者の年齢を全体的に見ると、19歳以下から80歳以上に亘り、50～59歳のところが261人（40.6%）と多い。女性は子育てが一段落し、今まで束縛されていた生活から解放されて、何か社会との関わりをもちたいと思い始める頃、男性は退職も間近に控え、何か趣味をもちたいと考え始める時期であろうか。

又、この現象を性別で比較すると、女性は50～59歳が240人（43.4%）と飛びぬけて多く、全体の半数近くを占めている。これに対して男性は60～69歳が22人（27.8%）となっている。女性は、70歳代になると人数が減り、80歳代は皆無となる。しかし男性は、70歳代には数は減ってきてはいるが11人（13.9%）あり、さらに80歳以上の学習者も2人ある。丸林実千代著『生涯音楽学習入門』（1999年音楽之友社）によれば、「足立シルバーアンサンブル」という東京都足立区に結成された音楽グループのメンバーの中には、86歳の男性でヴァイオリンを担当している人がいる。そして団員の平均年齢も66.4歳とかなり高い。^(註6) 一般的に言われているように、人間の機能は青年期である25歳前後を境にして下降するといわれているが、今日その常識を破る現実が徐々に現れている。80歳代の学習継続者は、筆者の調査では初めてであるが、今後こういった知的関心を自身の楽しみに向ける高齢者も増えてくるであろう。

(3) 職業（勤務形態）

学習者は、どのような職業についている人であろうか。表3は、勤務形態を示したものである。

表3. 職業（勤務形態）



全体的には主婦が占める割合が多く、327人（50.7%）と全体の半数に相当する。次いでフルタイムの人が109人（16.9%）、パートタイムの人が84人（13.0%）、退職者46人（7.1%）である。職業をもっている人を性別に見てみると、女性の場合はフルタイム、パートタイム、自営業で働いている人は220人（41.1%）、男性の場合は37人（46.8%）である。これらの結果から見ると、男

女ともに仕事を持ちながら、余暇の時間にオカリーナを取り入れていることがわかった。又、男性の場合、退職後の楽しみとしてオカリーナを楽しんでいる人も多い。

Q 2. 音楽的なバックグラウンド

(1) 学習動機

表4-1は、学習の動機を男女別に示したものである。回答の形式は、11問中最大限3つまで選んでもらった。オカリーナの音色が好きで学習を始めた人が男女とも多く、494人(78.1%)を占める。その数を性別で見ると、女性は432人(78.1%)、男性は54人(68.4%)となり、やはり「音色が好き」が学習動機の一つ目にあたる。多くの学習者は、オカリーナの音色に魅せられて学習を始めたことが分かった。しかし彼らは音色の何に魅せられたのであろうか。

表4-1. 学習動機(性別)

	女性		男性		性不明者		合計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
オカリーナの音色が好き	432	78.1	54	68.4	8	61.5	494	78.1
音楽が好きで何か演奏がしたかった	260	47.0	27	34.2	5	38.5	292	45.3
何か新しいことに挑戦したかった	171	30.9	21	26.6	4	30.8	196	30.4
他の人との親睦を深めたり、友人を得るため	96	17.4	6	7.6	1	7.7	103	16.0
ボランティア活動や地域に貢献するため	79	14.3	19	24.1	1	7.7	99	15.3
趣味や教養を高めるため	75	13.6	14	17.7	1	7.7	90	14.0
家庭生活や日常生活を充実するため	78	14.1	6	7.6	0	0.0	84	13.0
自由時間を有効に使うため	62	11.2	16	20.3	2	15.4	80	12.4
家族・知人に勧められた	54	9.8	16	20.3	4	30.8	74	11.5
健康維持や増進のため	48	8.7	5	6.3	1	7.7	54	8.4
何となく	15	2.7	2	2.5	0	0.0	17	2.6
調査対象者	553		79		13		645	

オカリーナの音色は、一般的に人の郷愁を誘い、田園的なゆったりとした気持をおこさせるといわれている。山本正子著『オカリナの子守唄』(1999年日本図書刊行会)、国松俊英著『土曜日のオカリナ』(1993年文溪堂)の小説は、楽器としてのオカリーナとは直接に関係無く、音の持つイメージを上手く使って、それを本のタイトルに用いている。^(註7) 前書は、死を迎える息子の悲しみをオカリーナの音色で表現し、後書はおじさんと不登校の子どもとの心の触れ合いの場面に朱鷺の姿をしたオカリナを登場させている。こんな所からも、人々がオカリーナの音色に寄せる想いは、音のもつ憂いと安らぎにあるのであろうか。

次に、表4-1の学習動機を年齢別にして、その年齢の違いによって動機に相違が生じるのか、について見てみよう。10歳代と20歳代、70歳代と80歳代は対象者が少ないので、前者を29歳以下とし、後者を70歳以上として統合させ、6つの世代にまとめた。表4-2は、学習動機を年齢別に示したものである。

表4-2. 学習動機 (年齢別)

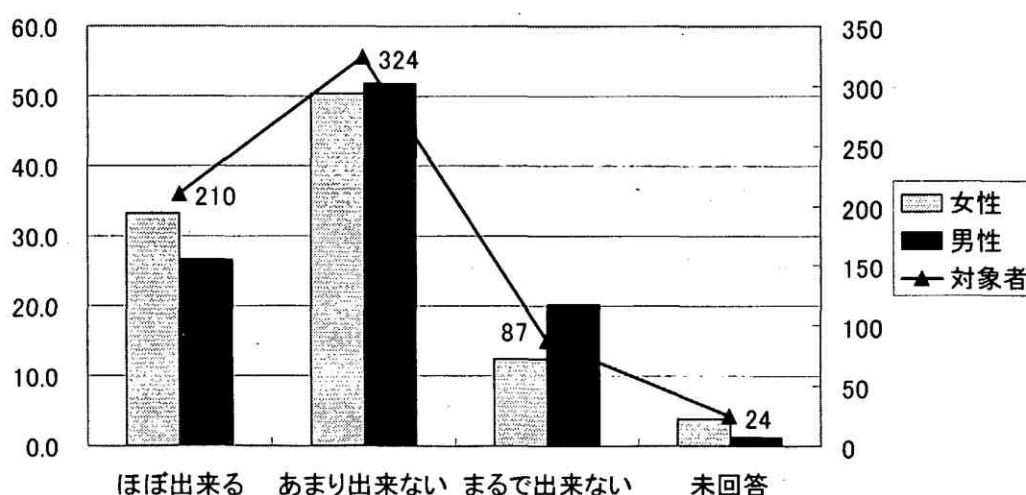
	29歳以下		30~39歳		40~49歳		50~59歳		60~69歳		70歳以上	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
オカリーナの音色が好き	16	61.5	34	85.0	97	81.5	198	75.9	121	76.1	25	69.4
音楽が好きで何か演奏がしたかった	10	38.5	17	42.5	52	43.7	128	49.0	70	44.0	13	36.1
何か新しいことに挑戦したかった	11	42.3	10	25.0	30	25.2	83	31.8	54	34.0	8	22.2
趣味や教養を高めるため	8	30.8	11	27.5	18	15.1	28	10.7	21	13.2	3	8.3
家族・知人に勧められた	7	26.9	4	10.0	19	16.0	29	11.1	11	6.9	4	11.1
他の人との親睦を深めたり、友人を得るため	0	0.0	8	20.0	14	11.8	47	18.0	27	17.0	7	19.4
家庭生活や日常生活を充実するため	1	3.8	6	15.0	12	10.1	38	14.6	25	15.7	2	5.6
ボランティア活動や地域に貢献するため	4	15.4	4	10.0	23	19.3	43	16.5	22	13.8	5	13.9
自由時間を有効に使うため	2	7.7	2	5.0	10	8.4	33	12.6	26	16.4	8	22.2
健康維持や増進のため	0	0.0	0	0.0	5	4.2	19	7.3	25	15.7	5	13.9
何となく	4	15.4	2	5.0	2	1.7	6	2.3	2	1.3	1	2.8
調査対象者	26		40		119		261		159		36	

各世代とも「オカリーナの音色が好き」で学習を始めた人が多く、中でも30~39歳の方は34人(85.0%)を占る。動機の2番目は、29歳以下は「何か新しいことに挑戦したかった」(38.5%)、30歳以上の全ての世代は「音楽が好きで何か演奏がしたかった」である。若者の動機は「何か新しいことに挑戦したかった」、中高年者は「音楽が好きで何か演奏がしたかった」であり、その動機について違いが見られた。

(2) メロディーが口ずさめる程度

次に、楽譜の読める程度について見てみよう。表5-1は、学習者のメロディーが口ずさめる程度を男女別に示したものである。

表5. メロディーが口ずさめる程度 (性別)



メロディーが「まるで出来ない」と答えた人は、女性69人(12.5%)、男性16人(20.3%)あった。この数字を「あまり出来ない」と合わせると、女性は62.4%、男性は72.2%の人は楽譜がスムーズに読めないということである。前述した『大正琴の世界』でも学習者の63.5%の人は楽譜が読めないという。オカリーナの学習者、大正琴の学習者ともに楽譜を読むことを苦手として

いることが分かった。この現象は、メロディーラインが歌えなければ、オカリーナが吹けないということではないが、しかしスムーズに吹いていけないことは事実である。多くの中高年者は、学校教育の中で楽譜を読むという教育をあまり受けてこなかった。一時期、小泉文夫著『おたまじゃくし無用論』（1973年いんなあととりっぷ）が出版され、楽譜の読めない人も勇気をもって音楽に踏み出した。しかし学習を始めると、楽譜が読めないことが障害となり、挫折した人も何人かあった。^(注8) 丸山圭三郎は、彼の著書『人はなぜ歌うのか』（1991年飛鳥新社）の中で、正しく歌うためにも最低限の楽典を学ぶことが必要である、と述べている。^(注9) 小島美子著の『日本の音楽を考える』（1983年音楽之友社）によると、日本人は千年以上もの長い間水田で暮らしてきた定着農耕民であるから、本質的に農耕民的なリズム感をもっている。そのリズム感とは、西洋の躍動的でダイナミックなリズムとは異なり、静的で、規則的な枠にはまらない、伸び縮みする無拍のものであるという。^(注10) そのような音楽的バックグラウンドの中で育ち、そしてある程度年を取ってから学習を始めた中高年者が、瞬時に音を追い、一定の拍の中でメロディーを奏でていくということがいかに大変なことであるか、筆者も何人かの中高年者と学習をともにする事により、この難しさを感じた。

(3) 好きな音楽

好きな音楽を21種類挙げ、その中から好きなものを最大限5つまで選んでもらった。表6-1は、好きな音楽を性別に示したものである。

表6-1. 好きな音楽（性別）

	女性		男性		未回答		合計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
ピアノ曲	263	47.6	32	40.5	3	23.1	298	46.2
フォークソング	197	35.6	20	25.3	3	23.1	220	34.1
弦楽曲	170	30.7	29	36.7	5	38.5	204	31.6
童謡・小学唱歌	180	32.5	18	22.8	5	38.5	203	31.5
ポップス	169	30.4	23	29.1	2	15.4	194	30.1
シンフォニー	140	25.3	22	27.8	3	23.1	165	25.6
吹奏楽曲	121	21.9	25	31.6	4	30.8	150	23.3
映画・アニメソング	115	20.8	14	17.7	1	7.7	130	20.2
演歌・歌謡曲	96	17.4	25	31.6	2	15.4	123	19.1
わらべ歌	110	19.9	8	10.1	3	23.1	121	18.8
世界の民謡	107	19.3	9	11.4	2	15.4	118	18.3
ジャズ	89	16.1	17	21.5	1	7.7	107	16.6
ミュージカル	95	17.2	6	7.9	2	15.4	103	16.0
声楽曲	71	12.8	6	7.6	2	15.4	79	12.2
日本民謡	67	12.1	10	12.7	1	7.7	78	12.1
その他の邦楽	66	11.9	11	13.9	2	15.4	79	12.2
オペラ	48	8.7	4	5.1	1	7.7	53	8.2
ロック	30	5.4	5	6.3	0	0.0	35	5.4
その他	6	1.1	2	2.5	0	0.0	8	1.2
調査対象者	553		79		13		645	

男女共にピアノ曲が好まれ、女性は263人（47.6%）、男性は32人（40.5%）の人が一位にあげている。2位は女性の場合はフォークソング、男性は弦楽曲、3位は女性の場合は童謡・小学唱

歌、男性は吹奏楽曲、演歌・歌謡曲となっている。この結果を男女比較して見ると、女性は歌うことを中心とした音楽、男性は楽器を主体とした音楽である。オカリーナの学習者は、一般的にクラシック的な音楽を好む傾向にある。

表6-2「好きな音楽」(年齢別)は、表6-1「好きな音楽」から好きな度合いの高いものを抜き出し年齢別に示し、それぞれの年齢において好きな順位を①、②、③で示したものである。

表6-2. 好きな音楽(年齢別)

	29歳以下	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70歳以上
ピアノ曲	①	①	②	①	①	②
フォークソング	③	③	①	③		
弦楽曲	②				②	②
童謡、小学唱歌				②	③	①
ポップス	①	②	③			
シンフォニー					③	
映画・アニメソング	①					
わらべ歌						②
歌謡曲、演歌						③
日本民謡						③

表6-2から分かるように、ピアノ曲は40-49歳と70歳以上を除いた年代で好まれている。その他にも青年は、テレビや映画で流されているポップス、映画・アニメソングなどのテーマソングをも好み、音楽の選択が広がっている。中高年者は、日本や西洋のクラシック音楽が好きであり、そして70歳以上の高齢者は、わらべ歌、歌謡曲、民謡など日本の伝統的な歌の曲を好んでいる。この結果から、彼らの音楽の好みは、青年・中高年者・高齢者の間では相違があることがわかった。

(4) 演奏できる楽器(オカリーナ以外)

オカリーナ学習者は、何か他の楽器も演奏できるのだろうか。表7-1は、演奏できる楽器の有無を示し、表7-2は、演奏できる楽器名を示したものである。

表7-1. 演奏できる楽器(オカリーナ以外)

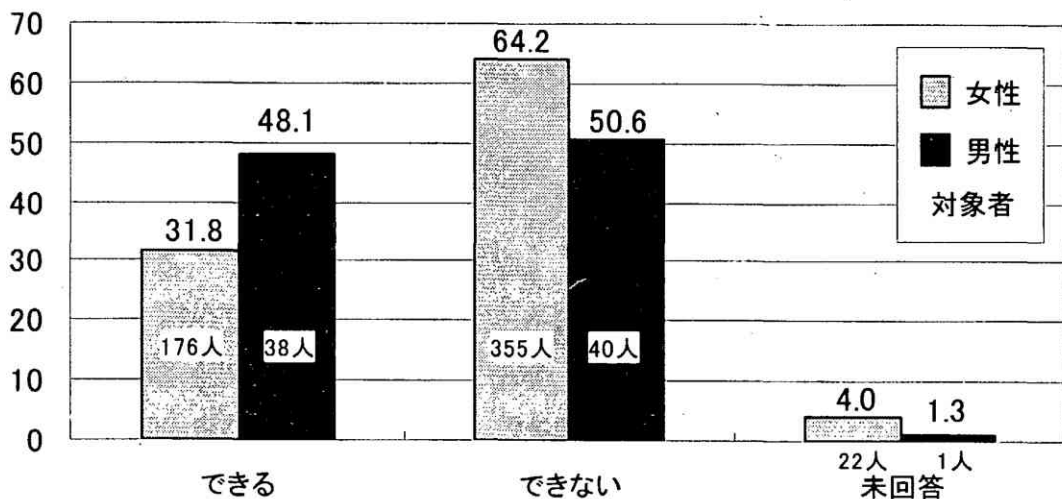


表 7-2. 演奏できる楽器名

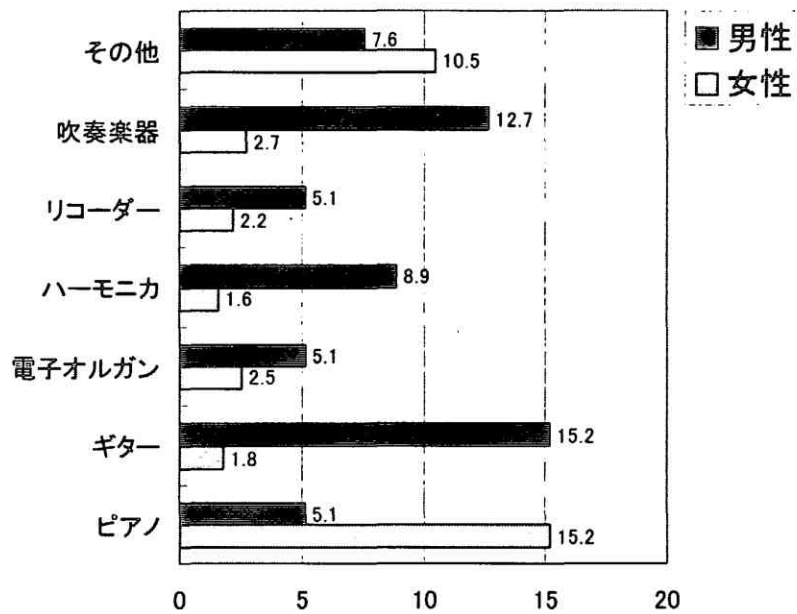


表 7-1 「演奏できる楽器（オカリーナ以外）」によれば、「できない」と答えた女性は355人（64.2%）、男性は40人（50.6%）であり、半数以上がオカリーナ以外に演奏できる楽器が無いことが分かった。しかし、逆にいえば、女性の176人（31.8%）、男性の38人（48.1%）は何か他の楽器ができるということである。では、彼らは、どんな楽器が演奏できるのであろうか。表 7-2 は、演奏できる楽器を具体的に書いてもらった。

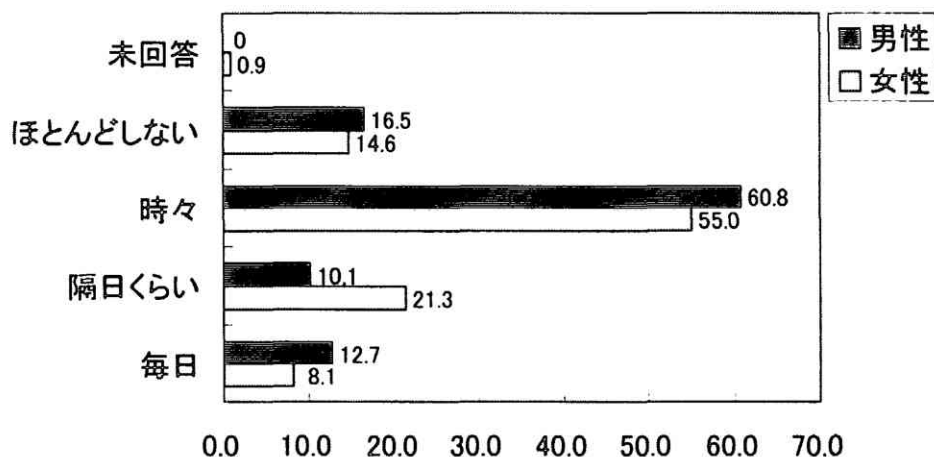
演奏できる楽器については、男女の間ではっきりと相違が見られた。女性はピアノが多いのに対して（15.2%）、男性はギター（15.2%）、そして吹奏楽器（12.7%）と答えた人が多かった。

Q 3. 練習の程度

(1) 練習の程度（レッスン日以外）

学習者は、どの程度レッスン日以外に自分で練習しているのであろうか。表 8 は、レッスン日以外の練習の状況を示したものである。

表 8. 練習の程度（レッスン日以外）（性別）



上記の表8によると、オカリーナ学習者は、「時々」練習をしている人が多い。「毎日練習する」と答えたのは、女性45人(8.1%)、男性10人(12.7%)であった。これを大正琴学習者と比較してみると、彼らの練習の程度は17.3%であり、この数字はオカリーナ学習者よりやや高い。大正琴学習者には、それぞれの流派で指導者の資格取得制度が確立されているために、その資格取得を目指して学習している者が34.7%あり、その制度が彼らの学習意欲を高めているのかもしれない。

(2) オカリーナの学習歴

前述した名古屋市立大学人文社会学部研究紀要第11号の「オカリーナ成立年度」によれば、全国的にオカリーナが普及・発展したのは、1997年～98年頃であり、この頃がオカリーナの発展のピークであった。この普及・発展と学習者の音楽歴とはどのような関係があるのであろうか。以下、彼らの学習歴を示した。

表9. オカリーナ学習歴(性別)

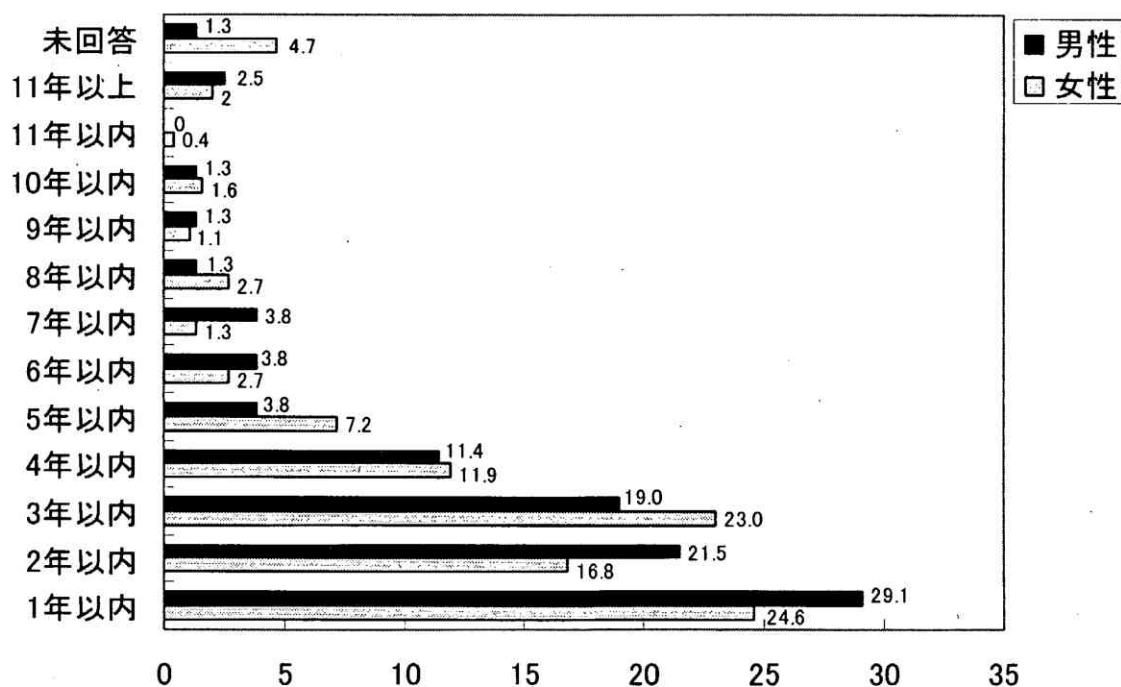


表9から分かるように、学習者は男女ともに一年以内の学習者が多く、女子は136人(24.6%)、男子は23人(29.1%)である。3年以内の学習者は、女子は127人(23.0%)、男子は15人(19.0%)あり、1～3年の比較的短い期間の学習者が全体の60%以上を占めている。そして3年をピークに学習者の数は、だんだん減少している。一方、大正琴の学習者の学習歴を見ると、10年以上続けている人が33.5%ある。オカリーナの場合は1.6%と低く、2つの楽器を比較すると学習歴にかなりの差が見られる。これは、オカリーナの歴史が浅いため比較できる条件ではないが、学習歴の短かさが感じられる。

(3) 難易度

学習者は、オカリナの学習レベルをいかに感じているのであろうか。表10は、難易の程度を示したものである。

表10. 難易度 (性別)

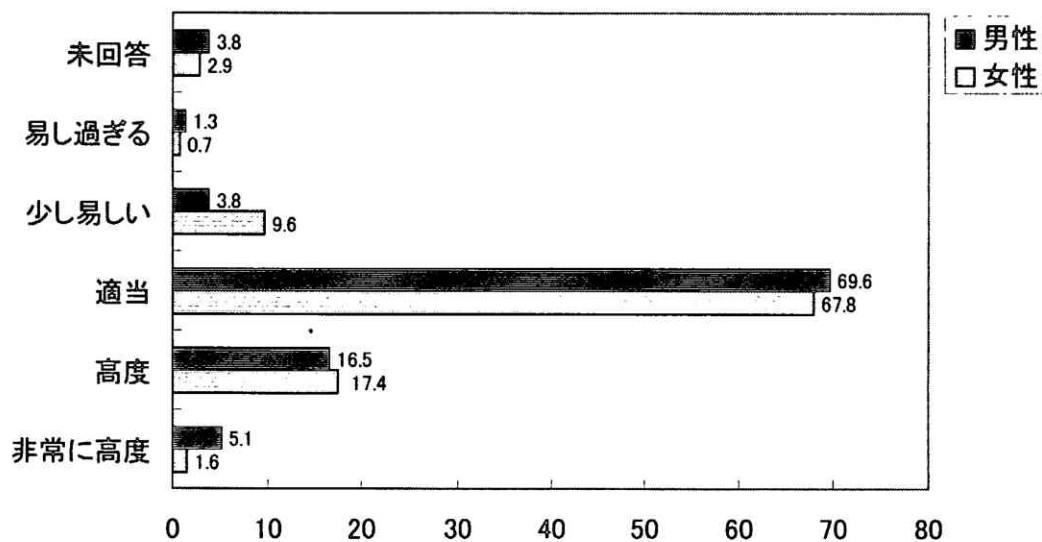


表10の「難易度」を見ると、「適当」と答えた女性は75人 (67.8%)、男性は55人 (69.6%) あり、70%近くの人が適当と感じている。難易の程度は、あまり難しくなく、適当であることが分かった。では次に楽しさの程度を見てみよう。

(4) 楽しさの程度

表11は、どのように楽しんでいるのかについて示したものである。

表11. 楽しさの程度 (性別)

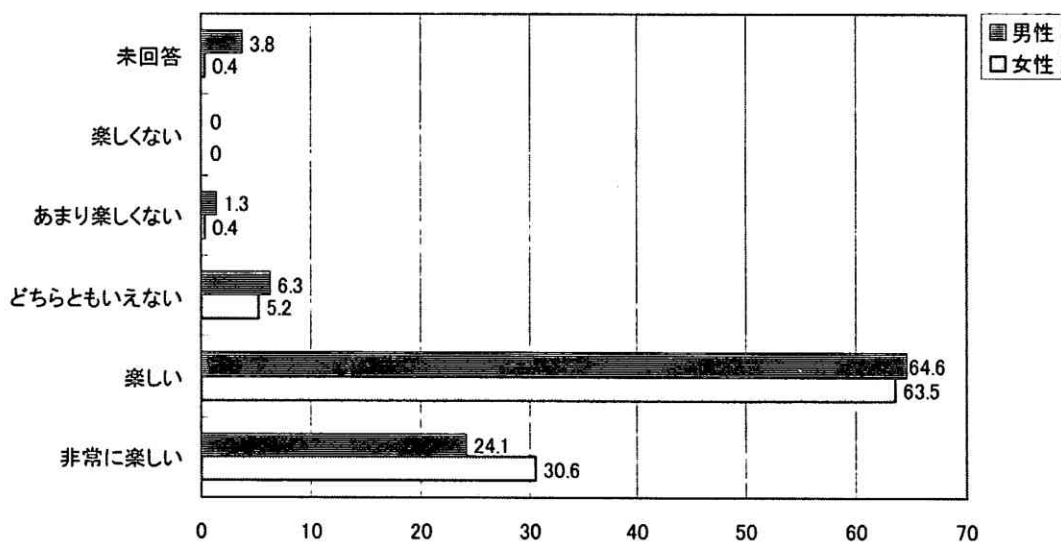


表11から分かるように「非常に楽しい」「楽しい」と答えたのは、女性520人（94.0%）、男性は70人（88.6%）と、かなりの人々が楽しんでいる様子がわかる。彼らは、学習の何に楽しさを見出しているのであろうか。又、その楽しみは、他の楽器や、他の稽古事ではなくオカリーナからしか得られないことであろうか。

Q4. 生活との係わり

(1) オカリーナ学習と生活

表12は、オカリーナの学習を始めたことにより、日常生活にどんな変化が生じたかを尋ねたものである。以下、その実態を示す。

表12. オカリーナ学習と生活（性別）

	女性		男性		性不明者		合計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
生活が楽しくなった	343	62.0	35	44.3	6	46.2	384	59.5
音楽に対する関心が広がった	294	53.2	46	58.2	4	30.8	344	53.3
友人関係が深まった	289	52.3	33	41.8	8	61.5	330	51.2
家でも練習するようになり、家庭での話題が多くなった	141	25.5	17	21.5	4	30.8	162	25.1
健康増進・精神安定につながった	121	21.9	20	25.3	1	7.7	142	22.0
時間を有効に使うようになった	109	19.7	22	27.8	1	7.7	132	20.5
教室外での演奏に付き合いの負担を感じる	16	2.9	3	3.8	0	0.0	19	2.9
金銭的な出費に負担がかかる	4	0.7	0	0.0	0	0.0	4	0.6
調査対象者	553		79		13		645	

女性は「生活が楽しくなった」と答えた人が最も多く343人（62.0%）、男性は「音楽に対する関心が広がった」が多く、46人（58.2%）となっている。男女ともに「生活が楽しくなった」、「音楽に対する関心が広がった」、「友人関係が深まった」と答えており、彼らの日常生活において精神的な豊かさと音楽に対する関心が広がっていることが分かった。

(2) 結び付けたい活動

表13「結び付けたい活動」は、記述式で答えてもらった。その結果、一人で3つくらい書いた人、白紙だった人、等さまざまであったが、381人から（59.1%）の474の回答を得ることができた。表13は、個々の記述を12の項目にまとめたものである。

表13. 結び付けたい活動

項目	回答数	%
ボランティア（老人ホーム、施設）	222	58.3
演奏活動	56	14.7
交流、行事に参加	49	12.9
生活の楽しみ	33	5.1
合奏を楽しみ	26	8.7
仲間を増やしたい	17	4.5
社会、オカリーナの普及に貢献	11	2.9
家族と吹きたい	10	2.6
技術の向上	9	2.4
健康増進	8	2.1

自然の中で吹きたい	7	1.8
指導者、研究者になりたい	6	1.6
その他	20	5.2
回答者	381	

調査結果を見ると、老人ホームや施設へボランティアとして演奏に行きたいという人が圧倒的に多く、222人（58.3%）あった。調査しているグループの中には、老人ホームや施設へ年間33回も出かけているところがあった。彼らは、自分たちが学習してきたことをどこかで聴いてもらえる対象として、老人ホームや施設での高齢者を選び、自分たちの演奏が喜んで受け止めてもらえたという喜び、社会奉仕できた満足感、参加者同士が交流できた喜び、自身の演奏技術の向上、これら全てを自身の生きがいとして感じているのであろう。オカリーナは、音色の響きや音量、姿、もの珍しさ、いろいろな国の曲が吹ける、等の庶民性と多少の芸術性を兼ね備えている点が、老人ホームや施設で受け入れてもらえる所以であろうか。

Q5. グループが練習している曲

(1) グループが練習している曲

次に、北海道から沖縄に至る67グループにおいて、彼らが練習している曲名を挙げてみた。表14は、練習している曲を各グループ2曲ずつ書いてもらい、そのリストを地方別にまとめたものである。曲名の後の(2)は、二つのグループが練習していることを示す。このリストから選曲についての地方的な特徴や好みについての違いが見られるであろうか。

表14. グループが練習している曲（地方別）

地方	グループが練習している曲	地方	グループが練習している曲
北海道・東北	埴生の宿(2), 思いでのアルバム, 浜千鳥	北陸・東海	見上げてごらん夜の星を(3)
	タウベルトの子守歌(2), 聖者の行進		コンドルは飛んで行く(2), 五月
	忘れな草をあなたへ, 春の小川, ふじの山		フライ・ミー・トゥー・ザ・ムーン,
	北国の春, 北上夜曲		おもいで, 星めぐりの歌, 夢路より
関東	エーデルワイス(2), 瀬戸の花嫁, ふるさと		北上夜曲, おぼろ月夜, 虹の彼方に
	三つの汽車の歌(2), モスクワ郊外の夕べ,		恋は水色, 幸せの黄色いリボン
	ネグリータ, 埴生の宿, サンタクルスの花		ムーン・リバー, 森へ行きましょう
	コンドルは飛んで行く, 森へ行きましょう		ラルルー, エデンの東, のぼら
	線路は続くよどこまでも, この木何の木		五月, 野に咲く花のように, 駅馬車
	踊ろう楽しいポーレチケ, Believ		春風によって, ブルースカイ
	シシリアーノ, はばたけ鳥, ロンド		となりのトトロ, 小さな世界
	アンダンティーノ, さくらさくら, モルダウ		ドレミの歌, 歌のつばさ, たんぽぽ
	浜辺の歌, ていんさぐぬ花, 小鳥のワルツ		アルデ・ラ, 夢見る想い
	さとうきび畑, 花の街, 太陽がいっぱい		アムール河の波, おしえて
信越	ドナドナ, カリンカ, 荒城の月, 大黄河	九州・沖縄	風が運ぶもの, 高原列車は行く
	夢のあとで, ジムノペティ, 大きな古時計		ラジオ体操の歌, ラジオ体操第1
	北の国から,		トトトの歌, トウモロウ
	島唄(2), 八木節(2), 春が来た, 浜千鳥,		エーデルワイス
	コンドルは飛んで行く, 春よ来い		瀬戸の花嫁, 北帰行, 花
竹田の子守歌, 真っ赤な太陽,	ドナドナ, タウベルトの子守り歌		
芭蕉布, 淡紅色の夢, 中田喜直メドレー	魔法のしらべ, 虹の橋, 少年時代		
トトロシリーズ, そよ風のデュオ	君をのせて, ラパースコンチェルト		
アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク	河は呼んでいる, 夏の思い出		

表14を見ると、北海道・東北では「埴生の宿」「タウベルトの子守歌」、関東では「エーデルワイス」「三つの汽車の歌」、信越では「島唄」「八木節」、北陸・東海では「見上げてごらん夜の星

を)、九州・沖縄では「瀬戸の花嫁」「夏の思い出」を練習している。この結果をみると、関東において「ていんさぐぬ花」をやり、沖縄においては「夏の思い出」を練習しているように、表14からは地域的な特徴や好みについての違いを見出すことはできなかった。地方的な特徴や好みの違いというよりは、多くの学習者が同じ出版社の曲集を使用することにより選択の巾が限られ、全国どこでも同じ曲を練習している、という現象が生じていることがわかった。しかし、このように練習曲を挙げることにより、学習者が日頃練習している曲の傾向がわかってきた。それは、日常生活において口ずさんでいるわらべ歌、文部省唱歌、ポップス、歌謡曲、馴染みのある映画・アニメ・テレビのテーマソング、民謡、等庶民性に富んだ曲が多い。それらの曲の多くは、オカリーナのために作曲されたというよりは、既成の歌のメロディーをオカリーナで吹けるように移調したり、多少の手が加えられているものである。オカリーナは、元来そのような曲を吹くためにふさわしい楽器であろうか。

(2) 練習している曲

表15は、彼らの練習している曲を示したものである。

表15. よく吹かれる曲

タイトル	練習しているグループ数
コンドルは飛んで行く	4
エーデルワイス	3
タウベルトの子守歌	3
見上げてごらん夜の星を	3
埴生の宿	3
となりのトトロ	2
ドナドナ	2
三つの汽車の歌	2
森へ行きましょう	2
瀬戸の花嫁	2
島唄	2
八木節	2
浜千鳥	2
北上夜曲	2

全グループを通じてよく吹かれる曲を挙げてみると、芸の見せ所、聴かせ所をもつ「コンドルは飛んでいく」が4ヶ所あった。この曲を吹きたいと憧れる人は多いが、グループで取り上げているのが少ないのは意外であった。この曲は、個人の技量差からくる難易度の違いとソロ的な要素が強いために、大勢で吹くのには向いていないからであろうか。「エーデルワイス」、「タウベルトの子守歌」、「見上げてごらん夜の星を」、「埴生の宿」がそれに続く。オカリーナでよく吹かれている曲は、テンポのゆったりした曲で、叙情性に富んだ曲であることが分かってきた。

V. むすび

以上、オカリーナ学習者の実態を述べてきた。この結果から、彼らの学習の動機、好きな音楽、音楽的なバックグラウンド、練習に対する係わり、又、学習を通じて彼らが望んでいる社会参加のあり方も分かり、学習者のおおよその全体像が浮かび上がってきた。

これらの中から「生涯音楽学習」に繋がるいくつかを拾い上げ、今後の研究に結び付けていきたいと考える。

①多くの人(78.1%)は、オカリーナの持つ音色に魅せられて学習を始め、継続している。しかし音色の何に魅せられたのであろうか。オカリーナの音色は、かつて自分が過ごした子ども時代の思い出まで蘇らせてくれるのであろうか。この音色は、日本の文化の中で生まれた尺八などにも近く、学習するしないにかかわらず、誰でも感じる何かがあるのであろうか。この研究を深めることにより、生涯音楽学習にオカリーナを取り入れることの意味がわかってくるのではなかろうか。

②全体に学習歴が短く、3年以内という人が(60%)である。なぜ、彼らは、継続させないのであろうか。半ば遊び心でいろいろな種類の音楽を吹くことができる、というメリットがある反面、複雑な表現、音域の制限という面において不満が生じるのであろうか。難かしさにおいても「適当」と答えた人々がなぜ3年もしないうちに学習を止めてしまうのか。その原因の中には、今後の研究に結び付けていくカギが隠されているように思われる。

③楽しさの程度は、93.4%の人が「楽しい」と感じている。いったい彼らは、オカリーナのどこに、あるいは学習のどこに楽しさを感じているのであろうか。この楽しさは、皆の合奏から生じるハーモニーの中に身を置く心地よさなのか、交流することの面白さなのか、上達する嬉しさなのであろうか。そしてその楽しさは、オカリーナからしか味わえないものであろうか。

④学習者たちは、なぜ施設や病院にボランティアに行き吹くことを好むのであろうか。オカリーナは、本当にそれにふさわしい楽器であろうか。多くの人(34.4%)が、社会貢献として施設や病院での演奏活動を求めている。山本思外里著『大人たちの学校』の中に紹介されている59歳の男性は、生涯学習についてこんなことを述べている。「人生の本当の喜び、幸福は世のため、他人のために役立つことにより自己の存在価値を実感できることであり、そのために、過去の知識経験に加えて、今学習していることのいくつかを、社会に還元できるように新たなプログラムを作るつもりである」と言う^(註11)。オカリーナ学習者の場合も、吹けるようになった曲を他人に聴いてもらい、相手の喜んでる姿に自分の存在価値を見出し、その奉仕できた喜びに満足しているのであろうか。しかし、この活動には、なぜオカリーナが適しているのであろうか。他の楽器や歌でも可能ではなかろうか。

以上、生涯音楽学習に繋がるいくつかの問題点を抜き出してみた。近年、人々の所得の増大、機械化、電化により生活に余暇と自由時間が生じてきた結果、自分自身の個性を伸ばし、趣味を楽しむためにお金と時間を投入する、というライフスタイルが生まれてきている。オカリーナを始めた人も自分にあつた何かをしたい、という強い学習意欲がオカリーナという楽器であつたのであろう。にもかかわらず、3年以上練習を継続している人の割合が低いように見受けられる。学習者は、音楽的な特殊教育を受けた人ではなく、主婦であり、有職者であり、退職者であるごく普通の人達である。これらの人々が、精神的な豊かさと喜びを求めて学習を始めたにもかかわらず、やめていくのには何か原因があるのではなかろうか。それは、個人的な理由によるものな

のか、楽器のもっている限界なのか、あるいは学習形態が本人に合っていないのか、等いろいろ推察される。これらのやめていった人々の理由、その後のオカリーナに対する接し方、考え方等の追跡調査、そして結果分析することにより、オカリーナと生涯音楽学習との結びつきを別な視点から見直す絶好の機会であると思う。

今回は、オカリーナの「音色に魅せられて始めた」人は音色の何に魅力を感じたのであろうか、学習を「楽しい」と感じている人は、どんな点が楽しいのであろうか、3年くらいで学習を「やめた」人は、どうして継続しなかったのであろうか、等オカリーナと生涯音楽学習の結びつきについて研究を深めていきたいと考えている。

(注1) 2001年11月発行 P. 209～225

(注2) 関東6、中部19、関西23、中国21、四国1、計70グループ

(注3) 1999年7月発行 P. 153～160

(注4) 第一章「学習を楽しむ」 P. 1

(注5) 第六章「現代人と大正琴」 P. 113

(注6) 「高齢者の音楽活動の実際」 P. 117

(注7) 土曜日のオカリナ、P. 138、オカリナの子守唄、P. 197

(注8) P. 33

(注9) 第3章「カラオケを楽しむために」 P. 61

(注10) 「日本人とリズム感」 P. 91

(注11) 大人たちの学校 P. 22

参考文献

- | | | |
|-----------|--------|-------|
| 人はなぜ歌うのか | 丸山圭三郎著 | 飛鳥新書 |
| 生涯音楽学習 | 丸林実千代著 | 音楽之友社 |
| 日本の音楽を考える | 小島美子著 | 音楽之友社 |
| 大人たちの学校 | 山本思外里著 | 中公新書 |